

伝聞のモダリティと文法化

金城 由美子

長崎純心大学 人文学部

kinjo@n-junshin.ac.jp

1 はじめに

複合辞とは、いくつかの語が複合したものが一つの形式として機能語の役割を果たすものである。複合辞の成立には、動詞や名詞がその実質的な意味や統語的性質を失い、形態的に固定され、機能語へと変化していく過程である文法化が深く関わる。文法化の枠組みを複合辞研究に適用することの有効性は [4] において示されている。本稿では、伝聞を表す「といわれる」と他の用法との比較から「言う」の多義性と文法化の関係について考察を行い、文法化の過程に動作主性の喪失が関わっていることを示す。

「言う」は「する」や「なる」に比べ実質的な意味を持つにも関わらず、多数の複合辞・複合表現に含まれ、文法化の度合いの異なるさまざまな用法が共時的・重層的に存在する [6, 1]。「という」は文末において伝聞のモダリティを表す複合辞とされるが、「という」の受動態の形式を持つ「といわれる」も伝聞の用法を持つ。

本稿では、伝聞を表す「といわれる」の用法を概観した後、複数の用法を持つ「といわれる」が書き言葉においてどのように使われるかを『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ (2009 年度版) (以下、BCCWJ2009 モニター版) を用い調査した。そして、伝聞の「といわれる」が複合辞の基準を満たすことを示した上で、その文法化の過程と動作主性の関係について考察を行う。

2 伝聞を表す「といわれる」

まず「という」との比較を通して、「といわれる」の伝聞としての用法を概観する。

文末に現れる「という」は、伝聞を表す。他から聞いて得た知識を推論を加えず、そのまま伝えるムードとされる [2]。

(1) 昔は紙雛を贈ったという。(PB43_00399)*¹

「といわれる」も「という」と同等の働きをする。

(2) 親の背を見て子は育つといわれる。

(PB49_00097)

(3) 日本人の平均的読書速度は、一分間に五〇〇字から七〇〇字といわれる。(LBj0_00015)

伝聞の「という」では情報源を「～によれば/よると」で示することができる [2]。「言う」の動作主は「ものを言う」のような慣用句を除けば人に限られているが、情報源は人に限らず、書籍などの無生物も可能である。

(4) 『平家物語』によれば、寿永元年 (一一八二) の源平合戦に際し、恵日寺の宗徒は平家に味方して、木曾義仲追討のため信濃へ出兵したという。(PB42_00286)

(5) これは光恵さんによると京の文化だという。(LBq1_00027)

伝聞を表す「といわれる」も、「～によれば/よると」により情報源を明示することができる。

(6) ブハラでは「三つ子」が尊ばれ、伝承によれば、「三つ子」は王宮で王子とともに育てられたといわれる。(LBh2_00020)

(7) しかも文献によると、かつてこの両湖は各々独立した湖で、干潮時には水面すれすれまで土が現われたといわれる。(LBr1_00025)

「といわれる」は「言う」の受動態を含むが、動作主を表す二格の要素とは共起しない。一方「といわれる」が伝聞を表さない場合は、二格またはカウ格と共起する。これらの事実から、伝聞の「といわれる」は、受動

*¹ BCCWJ2009 モニター版の例文にはサンプル ID を付す。

態としての統語的性質を失っていると考えられる。非伝聞の用法は二種に分けられ、ここでは助詞「と」が節と共起するものを発話、名詞句（通常は名前や呼称）と共起するものを同定と呼ぶ。

(8) 友人には、あなたは雰囲気がない、と言われる。
(PB59-00134)

(9) アイヌの血を引いていて、回りからも「アイヌ」と言われる。(LB13-00007)

伝聞の「という」は過去の表現を持たない [2] が、「といわれる」は「といわれた」という過去の表現を持ち、テンスという動詞としての統語的性質を残している。

(10) かつて家電製品の普及の進みように二つの異なるタイプがあると言われた。(PB53-00185)

また、「～ている」と共起することも可能であるが、「といわれる/といわれている」に実質的な意味の違いは見られない。

(11) 日本人の平均的読書速度は、一分間に五〇〇字から七〇〇字といわれている。(cf. (3))

これは「といわれる」がアスペクトの対立という動詞としての性質を失っているためと考えられる。

本節では「といわれる」の伝聞用法を概観したが、「といわれる」は伝聞以外の意味でも使用され、複数の用法が共存している。次節において、書き言葉における「といわれる」の各用法の分布について述べる。

3 書き言葉における「といわれる」

BCCWJ2009 モニター版のうち、書籍・白書・Yahoo! 知恵袋コーパスから文末の「といわれる」「といわれた」の用例を収集し、分析を行った。国会会議録は、敬語が多く含まれるなど書き言葉と異なる特徴を示すため、分析の対象から除外した。

伝聞以外の用法は、前節で示した受動態の発話 (8)、同定 (9) に加え、「られ」が尊敬を表す発話 (12)、同定 (13) が見られた。

(12) 親鸞聖人は仏の前にはすべての人々が兄弟姉妹だと言われた。(OB4X-00215)

(13) 園長さんのお名前は染谷健郎さんといわれる。(LB14-00041)

表 1 に各用法の頻度を示す。用例には「言われる」「云われる」などの異表記も含めた。

	トイワレル	トイワレタ
伝聞	518	154
発話 (受動)	36	36
同定 (受動)	34	24
発話 (尊敬)	5	24
同定 (尊敬)	2	0

表 1 「といわれる」の各用法

各用法の分布から「といわれる」「といわれた」ともに伝聞が主な用法であることがわかる。しかし、過去形の「といわれた」では頻度が著しく落ち、伝聞以外の用法、特に発話の割合が増す。

4 複合辞としての「といわれる」

ここでは「といわれる」の複合辞としての性質を検討した後、複合辞性の尺度という観点から「という」との比較を行う。

まず、「という」は一般に複合辞と認められているが、「といわれる」の各用法が複合辞と認められるかについて考える。複合辞認定基準として、[3] では次の 3 点があげられている。

- I. 形式的にも意味的にも辞的な機能を果していること。
- II. 中心となる「詞」は実質的な意味が薄れ、形式的・関係構成的に機能していること。
- III. II の語の他に辞的な要素等が結合して一形式を構成する場合、その要素の持つ意味が II の語に単に付加されたものではなく、形式全体として独自の意味が生じていること。

発話、同定の「といわれる」は受動、尊敬のどちらの用法においても、「言う」の実質的な意味と統語的性質を保っており、複合辞とは考えられない。

伝聞の「といわれる」では、ひとまとまりの形式として助動詞に相当する機能を果たし、中心となる「詞」である「言う」の発話という実質的な意味が薄れ、伝聞という独自の意味が生じている点、また二格やカウ格と共起するという受動態の動詞が持つ性質を失っている点から、I, II, III を全て満たすと考えられる。

複合辞と認められる要素の間でも、その複合の度合い、つまり文法化の程度はさまざまに異なる。ここで

は「という」と「といわれた」の間に文法化の程度に違いが認められるかについて検討する。複合辞性の尺度として [3] では以下の 3 点が挙げられている。

- (i) 構成素の緊密化の度合い
- (ii) 形式名詞・形式用言の形式化の度合い
- (iii) 形式用言の文法範疇喪失の度合い

(i) をはかるものとして、形式の一部に他の助詞や修飾語が挿入できるかという観点がある。

(14) 昔は紙雛を贈ったと { も/*だけ } いう。

(15) 親の背を見て子は育つと { も/*だけ } いわれる。

以上の例などから、構成素の緊密化の度合いは同程度と考える。

(ii) は中心となる形式名詞・形式用言について、どれだけ実質の意味が薄れているかを問題とする。「という」「といわれる」は「言う」の実質的な意味が薄れた結果、伝聞という共通の意味を持っており、(ii) も同程度といえる。

(iii) については、異なる点がいくつかある。伝聞の「という」にはテイルがつかないが、「といわれる」にはテイルがつくが例文 (11) が示すように意味の違いは生じない。また、「という」に過去の表現はないが、「といわれる」は「といわれた」がある。

つまり意味的な観点では、「という」と「といわれる」の違いは見られないが、動詞としての文法範疇喪失の度合いは「という」が大きく、より複合辞性が高いといえる。

複合辞性の高さ、つまり機能語としての性質の強さは、ひらがな表記が増えるという点にも反映されている。表記に関しては、発話で「いう」を用いるものも、伝聞で「言う」を用いるものもあり、個々の表記によって用法の判断はできない。しかし、それぞれの総数を比べると、実質語としての性質が強い過去形に「言う」が多く使われ、複合辞性が高いものに「いう」が使われる傾向がみとれる (表 2)。

	トイウ	トイワレル	トイワレタ
い	7410	477	106
言	745	116	131
云	27	3	1

表 2 表記の分布

5 文法化と動作主性

前節において「という」「といわれる」は共に伝聞を表す複合辞であることを示したが、本節では伝聞へいたる両者の文法化の過程について考察を行う。

「といわれる」の伝聞以外の用法は、発話と同定の二種がある。同定は助詞「と」が名詞句と共起し、伝聞とは異なる統語構造を持つので、ここでは発話から伝聞への文法化が起きたものと仮定し、その要因を考えていく。

まず発話と伝聞はどちらも節と共起するが、共起する節の性質が異なる*2。伝聞は対事的ムードの節までと共起し、対他のムードの節とは共起しない [1]。そのため、(17) のように終助詞など対他のムードを含む場合は、伝聞でなく、発話と解釈される。

(16) 一番乗りの女性は午前 10 時に来たという。

(PB47_00013)

(17) 一番乗りの女性は午前 10 時に来たのという。

次に発話と伝聞の違いは、発話者つまり動作主の存在である。伝聞には、動作主が現れない。動作主と解釈できる要素が現れた場合、発話の解釈が可能となる。「一番乗りの女性」を動作主と捉えた場合、(16) は発話と解釈される。しかし、(16) を過去形に変えた (18) が明らかに発話があったことを示唆するのと比べると、(16) は発話が行われたかどうかは明確ではない。

(18) 一番乗りの女性は午前 10 時に来たといった。

そこで、(16) には伝聞、発話の他に、主張の解釈があるものと考ええる。主張の命題内容は節によって表現されるが、伝達の手段は発話とは限らない。統語構造は発話と同じで動作主を必要とし、「言う」は複合辞を構成しない*3。

(19) 主張: 一番乗りの女性は [午前 10 時に来た] という
伝聞: [一番乗りの女性は午前 10 時に来た] という

(17) が発話の解釈のみを持つことから、主張も伝聞と同様対事的ムードの節と共起し、対他のムードの節とは共起できないことがわかる。各用法の統語構造の違いを表 3 にまとめる。

*2 節の分類については [5] に従う。

*3 発話、主張ともいわゆる引用構文に含まれるが、両者を区別するため引用という語の使用を避け、発話、主張を用いる。

	動作主	共起する節
発話	あり	対他的モード
主張	あり	対事的モード
伝聞	なし	対事的モード

表3 各用法の統語構造の違い

主張は、発話と伝聞の中間的な統合構造を持つ。共起する節が対他的モードから対事的モードに変化することで、節が具体的な発話から命題内容に変化し、さらに主張の主体である動作主が失われることで話し手以外の主張が提示される伝聞の用法へとつながっているものと考えることができる。

動作主の存在という観点から、意味の変化を考えると、発話という基本的意味では動作主は1回限りの意図的な動作を行う主体であり、一般的な動作主性を備えている。主張と解釈可能な(16)では現在形が使われているが、動作動詞が現在形で現れる場合通常未来の動作を指すのに対し、(16)は未来の動作を表さず、「いう」は状態性を帯びていると考えらる。つまり、主張の動作主性は、発話より低い。

発話という基本的意味では1回限りの動作を示すが、状態性を帯びることで具体的な発言内容ではなく命題的内容を伴う主張の意味に変化する。さらに動作主が欠落することで、命題的内容の節が話し手以外の主張を提示するものへと変化し、伝聞の用法となったと考えることができる。動作主性の喪失が、発話から主張、伝聞への変化をもたらしている。

(20) 動作主性と意味の変化

動作主性 高 低
発話 > 主張 > 伝聞

最後に、動作主性の観点から、「という」と「といわれる」の違いについて考える。どちらも伝聞を表し、ガ格や二格による明示的な動作主を取ることができないという点は共通している。しかし、「という」では動作主が完全に失われているのに対し、「といわれる」は受動の要素「られ」によって潜在的動作主 (implicit agent) の存在が認められており、動作主性がいくぶん高いと考えることができる。「といわれる」では、潜在的動作主により伝聞が伝える命題内容の主張を行う主体が存在することが示唆されているため、「という」との間にわずかな意味の違いをもたらしているものと考えられる。また、前節で論じた「といわれる」より「という」

の複合辞性がより高いという点も、動作主性の喪失の度合いの違いとして説明できる。

6 おわりに

本稿では、書き言葉に現れる「といわれる」が複数の用法で重層的に使われている実態を均衡コーパスを用いて明らかにした。さらに主たる用法である伝聞の「といわれる」が複合辞であることを示し、「という」と「といわれる」の伝聞用法は、発話を意味する「言う」から動作主性の喪失による文法化の結果生じたものであるという仮説を提出した。

文法化の過程について、統語構造の観点から同定は分析の対象に含めなかった。しかし、発話が通常特定の主語を取るのに対し、同定では動作主が特定されないことがほとんどであり、動作主性を比較すると、同定における動作主性は発話より低い。

(21) 現代ドイツ語の a、o、u の母音をウムラウトという。(LBh8.00001)

特定のでない動作主は、省略されやすく非人称構文につながる可能性が高い。(20)で示した動作主性と意味の関係に同定を組み込むことが可能かもしれないが、この点については今後の検討課題としたい。

参考文献

- [1] 金城由美子. 複合辞トイウにみる文法化の諸相. 特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップサテライトセッション予稿集, pp. 101-106, 2010.
- [2] 益岡隆志, 田窪行則. 基礎日本語文法. くろしお出版, 1989.
- [3] 松木正恵. 複合辞の認定基準・尺度設定の試み. 早稲田大学日本語研究教育センター紀要, Vol. 2, pp. 27-52, 1990.
- [4] 松木正恵. 複合辞研究と文法化—動詞が欠落した口語的複合辞を例として—. 藤田保幸・山崎誠(編), 複合辞研究の現在, pp. 197-220. 和泉書院, 2006.
- [5] 野田尚志. 単文・複文とテキスト. 日本語の文法 4 複文と談話, pp. 3-62. 岩波書店, 2002.
- [6] 砂川有里子. 「言う」を用いた複合辞—文法化の重層性に注目して—. 藤田保幸・山崎誠(編), 複合辞研究の現在, pp. 23-40. 和泉書院, 2006.